
意思決定過程としての コミュニティ・オーガナイズの 評価に関する研究

研究奨励交付金(B)2024年6月～2025年3月

国際教養学科 石神圭子

研究目的

アメリカにおけるコミュニティ・オーガナイズングの多くは、信仰ベースの組織(faith-based community organizing)によって行われている。本研究は、政策的アウトプットにおける文化的作用、とりわけ宗教や信仰心が組織の意思決定に機能する哲学的背景を明らかにする

研究方法:ヴァンダービルト大学神学部での研究者との意見交換
及びナッシュヴィルのコミュニティ組織のオーガナイザーへのインタビュー

1:ヴァンダービルト大学神学部での意見交換

Aaron Stauffer (Associate Director Wendland-Cook Program in Religion and Justice)

・ナッシュヴィルのコミュニティ組織、NOAHのオーガナイザーとしても活動。Snarrとともに、「ポスト世俗的転回(post secular turn)」を踏まえた公共圏の議論の中に自身の「経験」を位置づけ、神学的考察を行う。「宗教と政治は切り離されない。コミュニティ・オーガナイズングは金融資本主義だけでなく人種的不正義、人種資本主義を克服する「宗教的」(ヘーゲルの)実践とみなされうる」と主張。

Melissa Snarr (Associate Professor of Ethics and Society Director, Doctor of Ministry Program)

・宗教と政治は密接に結びついている。「労働の価値が棄損されている現在、宗教的实践によってその価値は公的なものとして再定義されうる」

※Snarrは日本での講演にも関心を示している。招聘する際には福岡女子大学での講演を依頼する。



Ecumenical Church in Divinity School

2: ポスト世俗的転回とCO研究

本研究によって確立したネットワークと研究動向



Luke Bretherton

元デューク大学神学部准教授。現在オックスフォード大学クライスト・チャーチ・カレッジ教授。

Resurrecting Democracy:

Faith, Citizenship and Politics of a Common Life (2015) でイギリスのCOで活動したエスノグラフィと神学政治の観点から common life とCO の関係を定義。



Mark Warren and
Richard Wood

Warren は元ハーヴァード大学教育大学院准教授、現在マサチューセッツ大学ボストン校公共政策学部教授。CO と民主主義、地域コミュニティの関係を研究。

Wood はニューメキシコ大学社会学部教授を務めたのち、現在は南カリフォルニア大学のカトリック高等研究所所長。宗教と市民社会、制度の関係を研究。



Melissa Snarr

現在ヴァンダービルト大学神学部准教授。アメリカにおける生活賃金運動に着目し、宗教活動家の貢献をエスノグラフィによって考察。著書に *All you that Labor: Religion and Ethics in the Living Wage Movement* (2011)



Aaron Stauffer

ヴァンダービルト大学神学部正義と倫理に関するプログラムディレクター。プレスビテリアンの牧師、コミュニティ・オーガナイザー。近著に *Listen to the Spirit: The Racial Gospel, Sacred Value, and Broad Based Community Organizing* (2023)

政治思想との関係

アリストテレス:「理性的な人間とは、我々が追求する目的の間にある適切な秩序の感覚によって駆動する。このことは、フロネシス(実践)によって把握される」

ハンナ・アレント:「命令服従モデル」に対する「関係的権力」の概念:「単に行動するだけでなく、協調して行動する人間の能力に由来する」

・神学研究者に共通するカント批判(カントの抽象的な実践理性は共同体に依拠するコンテクストな判断力ではない)(Bretherton 2015)

3:考察

神学がCOに着目する学問的背景:人権は自然権・自然法といった神学的概念に基づくものだが、現代の教会では世俗化された言語が用いられる。だが、他者との共通の生活、権力の非対称性の是正に関する判断や解釈は、聖書の解釈、政治哲学、社会理論などと交錯している。つまり、世俗と宗教は密接に結びつく。

近年の神学的立場からの研究は、理論(理性)ではなく実践(practice／フロネシス)を重要視する傾向にある。そのため、研究者らはエスノグラフィという方法論を用いてコミュニティ組織に入り込み、実践者に「なる」ことによって世俗と宗教の交錯、その民主主義的意義を示している。なお、エスノグラフィの有用性は近年、社会学・政治学などにおいて高まっている(ex: Auyero 2006)

4: 成果



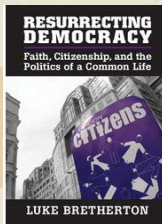
共著出版



共著『インフォーマルな政治の探求：政治学はどのような政治を語りうるか』所収論文 石神圭子「権力を持つのは誰か？：信仰ベースのコミュニティ・オーガナイズムの解剖」吉田書店、2025年。
ナッシュヴィルでのインタビューと意見交換を踏まえ、COの理解における政治神学的視座の重要性を紹介。



翻訳書 (Bretherton, *Resurrecting Democracy*) 完成



本研究を通して、すべての神学分野におけるCO研究がLuke Brethertonの著書を参照していることを踏まえ、Lukeに打診、翻訳メンバー（西山溪・秋田慎吾・坂無淳・渡辺裕一）を集め、申請者が監訳、解題を執筆。法律文化社、2026年出版予定。出版されれば日本で最初のアメリカにおける最新研究（政治神学におけるCOとデモクラシーの関係）を踏まえた翻訳書となる。



サントリー文化財団「学問の未来を拓く」（2024年8月～）採択／成果を2025年度NPO学会でパネル報告／書評執筆（英語）

サントリー文化財団「学問の未来を拓く」（代表）、研究課題「コミュニティと外部権力の暴力性：政治学・歴史学・神学と実践知の対話」（石神圭子・平体由美・堀川敏寛・国武ゆかり・廣岡睦／2024年8月～）←2025年度NPO学会パネル「コミュニティ・オーガナイズムをトランスナショナルに捉え直す——アメリカ・韓国・日本をめぐる地域共同体の困難」（石神圭子・平体由美・国武ゆかり・金美珍）（報告決定）／書評（2024年7月、Mark Santow, *Saul Alinsky and Dilemmas of Race* (University of Chicago Press, 2023)・*History: Reviews of New Books*



2025年3月20日: Luke Bretherton教授とのZoom打ち合わせ。議論は2時間半に及んだ。たとえば、conceptionとconceptの違い(ロールズの「正義論」における「概念」と「構想」)、contaminationistというwordに込めた意味、compound commonwealth(複合的コモンウェルス)という概念について。この点、多極共存型デモクラシーとは「異なる」意味での「コンソシエーション」独自の概念が説明された。オックスフォード大学における36のカレッジ、というある種の独立した組織の集合体の例を出して「コンソシエーション」「複合的コモンウェルス」を説明した点は興味深い。Lukeは一貫して、抽象的な理念を歴史に適用することを拒み、社会の中で実践的に作られていくプロセスに焦点を当てる。